平成２５年度
鳥取県議会ロシア沿海地方訪問団
報告書

〔平成２５年１０月２３日（水）～２６日（土）〕

沿海地方議会

ウラジオストク国立経済サービス大学

マツダソラーズマニファクチュアリング

極東連邦大学医療センター

鳥取県議会

ロシア連邦

沿海地方

沿海地方

1　訪問日程及び訪問先

平成２５年１０月２３日（水）～２６日（土）

ロシア連邦沿海地方ウラジオストク市

※　詳細は「４　日程表」のとおり

2　訪問団メンバー

団　長	上　村　忠　史	議員
副団長	内　田　博　長	議員
秘書長	銀　杏　泰　利	議員
団　員	浜　崎　晋　一	議員
〃	国　岡　智　志	議員
〃	坂　野　経三郎	議員

＜随　行＞　議会事務局調査課　課長補佐　上野芳広

係　長　梅林一成

文化観光局交流推進課　国際交流員　ジェルノワヤ・ユーリア

3　所感及び県政に対する提言

今回の県議会によるロシア沿海地方訪問団は、定期貨客船で鳥取県と結ばれ、経済発展の著しいロシア沿海地方との環日本海交流の促進を図ることを目的に、ウラジオストク市を訪問した。

今回の訪問の目的のひとつは、鳥取県とロシア沿海地方の経済交流の一層の促進を図るための調査で、在ウラジオストク日本国総領事やウラジオストク日本センターなどからの現地経済状況などの聞き取り、現地で実際に鳥取県との貿易にあたっている鳥取県ビジネスサポートセンターからも実情調査、また、現地の市場での農産物などの流通の状況の調査や、日本とロシアの自動車メーカーの合弁による自動車組立工場を訪問しての調査などを行なった。

さらには、ロシア沿海地方議会へゴルチャコフ議長を表敬訪問し、鳥取県とロシア沿海地方両議会の友好を深めるとともに、両地域の経済交流の発展について意見を交換した。

経済交流促進について、最も印象的であったのは、いずれの訪問先でも同様に言われたことであったが、ロシア沿海地方（おそらく極東地域全体でも）で、日本の地方自治体の中での知名度が、鳥取県は東京と並んで最も高いということであった。これは、第一には、成田とウラジオストクを結ぶ航空路線を除けば、唯一、日本とウラジオストクを結ぶ交通路である環日本海定期貨客船航路が存在していることが、その理由としてあげられる。また、鳥取県が、沿海地方でイベントや展示会などの情報発信を続け、現地での浸透を図ってきたことなど地道な努力によるものと推察している。

なお、私たちが、沿海地方を訪問した翌週、同じウラジオストク市で開催された第18回北東アジア地域国際交流・協力地方政府サミットの共同宣言で「環日本海定期貨客船などの交通路線の維持・発展のために協力し、最大限の努力を行なう」こととされたこと、平井知事とミルクシェフスキー沿海地方知事との会談での「環日本海定期貨客船の維持・発展、利用促進に向けて両地域で具体的作業を行なう」と確認されたことは、鳥取県のロシア沿海地方における地位の維持、向上に大いに貢献するものと考える。

鳥取県の沿海地方におけるこの知名度の高さは、今後、鳥取県が沿海地方をはじめとしたロシア極東地域で経済交流を促進していく上で、貴重なアドバンテージとなる。特に、定期貨客船という１週間に一度は荷物が定期的に届くという確実性のある物流ツールを有しているということは、農産物、工業製品などの輸出入において大きな優位性があるということである。

ぜひとも、鳥取県が他の国内地域に先行しているこの時期を生かして、積極的な施策を行っていくべきであると考える。特に、環日本海定期貨客船航路については、維持・存続を確実にして、さらに発展を図っていくため、利用客の増加や輸送荷物の増加を図るための対策を積極的に行っていくべきと考える。そのため、鳥取県産農産物の輸出拡大に引き続き取り組んでいくとともに、ウラジオストクでは普通自動車のほぼすべてが日本車であること、マツダやトヨタがソラーズと合弁して自動車組み立てを行なっていることなど、需要が見込める自動車部品や電化製品の部品などの工業製品を定時性のある環日本海定期貨客船を用いてロシアに輸出するなどの取組みの拡大を図っていくことを検討してはどうか。

鳥取県とロシアの経済交流を図っていくにあたり、今回の調査で最も可能性を感じたのは、農業分野であった。ロシア極東地域は、旧ソ連の崩壊に伴う農業政策の破綻により、農産物の生産が落ち込み、食糧の供給を輸入に頼っている状況である。この点で、定期貨客船航路を持つ鳥取県は、食料品の輸出で、輸送コストや定期性での優位性を持つとともに、高い知名度に支えられた農産物に対する信頼感もあり、輸出を拡大できる可能性があると考える。加工食品の輸出でも、例えばロシアでなじみのないカレーの試食イベントで、作り方を指導するなどし、継続的な消費を確保するための取組みも行なわれているなどの点も評価でき、今後の発展に期待できるものと考える。

農産物の輸出については、ロシア極東地域の所得水準が低いことと、鳥取県からの輸入品が高級品を中心としているため、規格外の低価格品など、輸出品の多様化を求める意見もあった。しかし、現地では中国や韓国・北朝鮮などから低価格の農産物が大量に輸入されており、これらの商品と競争を行うことは、安心で高品質という鳥取県の農産物へのブランドイメージを損なう危険性もある。ロシア政府による極東地域への人口増加政策（150万人規模の都市が出現するイメージ）や、エネルギー産業や製造業などへの積極的な投資により雇用環境の改善などが進めば、所得の向上も期待でき、今後は、増加が予想される中所得層への需要に応えることのできる物産を適正に見極め、輸出を図っていくことが必要であります。

一方で、農業については、中国など外国資本の導入による大規模な投資が行なわれており、一部、日本からも進出の動きはあるが、寒冷な気候のための燃料などによる高コストの必要もあるため、投資への判断は難しいと考える。むしろ、これらの農場などで生産された農産物や加工品を、不足が指摘されている定期貨客船のバックカーゴを利用することで、輸入・加工、または中国や東南アジアなどへ境港を経由して輸出するなど、新たな可能性について検討していくこともできるのではないか。

今後の沿海地方を含むロシア極東地域と日本の関係において、エネルギー資源は、最も重要なファクターである。ロシア極東地域は、石油、石炭、天然ガスなどの豊富な地下資源を有し、ウラジオストクの2,000キロメートル圏内には、日本をはじめ、中国、韓国という経済大国がある。アメリカのシェールガス革命、ヨーロッパの経済停滞などにより、輸出量が減少しているロシアは、経済成長などにより、需要が拡大している東アジアへ向けてのエネルギー輸出の拡大を目指している。東シベリアやサハリンからの天然ガスパイプラインは、ウラジオストクに達しており、今後、液化天然ガス（ＬＮＧ）製造工場や石炭の輸出ターミナルの建設計画もあり、エネルギー資源の多角的な確保が求められている我が国にとって、ロシア極東地域は、重要な供給地域となることは確実である。日本海における西日本の玄関口である境港は、他地域に先立って、ＬＮＧ輸入の拠点基地を誘致することを検討してみてはどうか。

また、鳥取県内の大学と交流している大学との一層の交流促進を図るため、ウラジオストク国立経済サービス大学を訪問し、鳥取環境大学との交流などについて意見を交わした。同大学は、鳥取環境大学にロシア語学科ができることに大いに期待しており、ロシア語教師の派遣などの支援の用意もあるとしている。同大学では、３年前に中国語、韓国語などの人気に押され、日本語学科がなくなってはいるが、今後の日本との交流の進展により将来の復活の希望を持っている。

また、同大学は、今後の沿海地方の経済発展に伴い深刻化が心配される環境問題に対応するための研究を進めようとしており、この分野での鳥取環境大学との提携を強めたい意向であった。鳥取環境大学の積極的協力に加えて、住民が積極的に環境保全に取り組んでいるなどの本県施策の情報提供などにより協力を図っていくことが、両地域の関係を一層良いものとすることに結びつくのではないか。

そこで、鳥取県が県費で鳥取環境大学にウラジオストク国立経済サービス大学からの日本語留学生や研究者を受け入れることを提案したい。海外の優秀な人材を受け入れることは、鳥取環境大学の水準向上に役立つとともに、鳥取県と沿海地方の経済交流の進展などの将来への出資となるのではと考える。ＰＭ２．５や漂流ごみなど国境を越え、環日本海で連携して取り組む必要がある環境問題への貢献ともなると考える。これにあわせて幼少期からの日本語教育のため、同大学の附属の小・中・高等学校の授業に日本語教育を組み込むことを提案したところである。

さらに、同大学では、日本から沿海地方への国際観光誘客について意見交換を行なったが、両地域はお互いに観光誘客を目指しており、ツアープロモーターの招聘などを積極的に図り、本県が東南アジアに向けて行なった活動などのノウハウを提供するなどして、環日本海定期貨客船や航空チャーター便などによる観光交流が促進されていくよう積極的な施策展開を図ることを望みたい。

また、極東連邦大学医療センターでは、鳥取大学医学部と同様に医療（手術支援）ロボット『ダヴィンチ』が導入されており、その他にもＰＥＴ－ＣＴなど最先端の医療施設が整っていることを視察した。今後、県立病院の改築という課題がある本県にとって、当該病院との交流を図っていくことは、本県の医療・福祉施策の検討にプラスになるものと思われる。

今回の訪問を通じて、ロシア沿海地方の大きな可能性を実感し、本県が、定期貨客船や高い認知度という優位性を十分に発揮し、一層の交流拡大を図って行くことで、今後のビジネスチャンスを逃すことなく、両地域の一層の発展に結び付けていくことの重要性を改めて強く認識した。

ウラジオストク市内の様子。車はほとんどが日本の中古車である。「とっとり」の名を冠した飲食店もあった。

4　日程表

■10 月 23 日（水）

08：40　鳥取空港　→　09：55　羽田空港　[ANA294]
09：00　米子空港　→　10：20　羽田空港　[ANA814]
14：15　成田空港　→　19：00　ウラジオストク空港　[S7　566]
19：40　ウラジオストク空港　→　20：40　ヒュンダイホテル（泊）

■10 月 24 日（木）

09：15　ウラジオストク駅　→　09：32 フタラーヤレーチカ駅（シベリア鉄道乗車）
11：30　ウラジオストク日本センター訪問
14：00　沿海地方議会表敬
15：00　鳥取県ウラジオストクビジネスサポートセンター訪問
16：00　ＶＬマート視察
17：30　在ウラジオストク日本国総領事館（総領事公邸）

■10 月 25 日（金）

09：30　ホテル発
10：00　ウラジオストク経済サービス大学訪問
14：00　ソラーズ極東視察
16：00　極東連邦大学医療センター視察
17：00　市内視察（中央広場周辺、鷲巣展望台地等）

■10 月 26 日（土）

11：00　日本人死亡者慰霊碑献花
11：30　ウラジオストク空港着
13：30　ウラジオストク空港　→　13：55　成田空港　[S7　565]
16：00　羽田空港　→　17：15　鳥取空港　[ANA297]
18：25　羽田空港　→　19：45　米子空港　[ANA817]

成田-ウラジオストクを結ぶS7航空機

ウラジオストク空港ビル

5　訪問先の概要

【平成２５年１０月２４日（木）】

ウラジオストク駅から３駅のフタラーヤレーチカ駅まで、シベリア鉄道を走る列車を用い、市内中央市場の視察に赴いた。なお、ウラジオストク駅は、環日本海定期貨客船が停泊するウラジオストク港ターミナルに直結しており、鳥取県からヨーロッパへ通じる海と陸の道の結節点であった。列車は、朝の通勤列車で座席は硬かったが、レール幅が広いため揺れも少なかった。車窓からの風景は、古い工場や建物、荒地などで、畑などの耕作地は少なく、荒涼としていた。

ウラジオストク駅。シベリア鉄道の東端の終点駅であり、ホームの中央には「モスクワより 9288KM」と刻まれた石造りのキロポストが立っている。駅舎のすぐ裏（東側）にウラジオストク港があり、プラットホーム・駅前広場と客船ターミナルとが跨線橋によって結ばれ、同港から境港へ、定期旅客船イースタンドリーム号が韓国の東海経由で週１便出ている。

（１－１）市内中央市場（フタラーヤレーチカ駅付近）

中央市場は、ウラジオストク市郊外の地元住民向けの一般的な市場である。魚や肉の市場では、生鮮品に加え、冷凍や燻製のものが目立ち、価格もそれほど安くは無かった。野菜は、季節的な理由もあるが小ぶりで日本のスーパーのものと比べ品質的に見劣りし、ジャガイモやたまねぎは安いが、それ以外のものは日本の価格より高いように感じられた。その他衣料品、雑貨なども品揃えはあるものの、デザインは、日本の一昔前のイメージと感じられた。

ダイドーの自動販売機が多くあり、中の缶コーヒーなどの飲料は日本語表記で、自販機にロシア語の解説があった。

郊外の地元住民向けの市場のほか、衣料品や化粧品店のマーケットを視察。思いのほか品物は高価であった。

※沿海地方の平均月収：
27,600 ルーブル（約８万円強）

（１－２）ウラジオストク日本センター

〔応対者〕大石荘平所長

大石所長から、ロシア極東地域の状況、今後の鳥取県との経済交流の可能性などについての説明を受けた。

【主な説明内容】

●ロシア沿海地方での鳥取県の知名度は、日本の地方自治体の中ではナンバー１。これは、定期航路を有していることや、イベントを多く行なってきていることの成果。

●ロシア国内での極東地域の位置付けは、これまでは資源供給地であったが、今後、アジア・太平洋地域の発展に伴い、重要性と魅力が高まっていく。

ロシア連邦、極東連邦管区、沿海地方の比較

	域内総生産	全国比	推計人口	全国比	面積	全国比
ロシア連邦	45 兆 2650 億ルーブル	—	142,914 千人	—	17,098 千㎢	—
極東連邦管区	2 兆 5210 億ルーブル	5.57%	6,284 千人	4.40%	6,169 千㎢	36.08%
沿海地方	5470 億ルーブル	1.21%	1,953 千人	1.37%	165 千㎢	0.96%

●ウラジオストクから 2,000 キロメートル圏内には、中国、韓国、日本という経済大国があり、ロシア極東地域には、地下資源（エネルギー資源）がある。これは、ロシア極東地域にとっての経済交流の武器となる。

・東方天然ガスプログラム

東シベリアとサハリンの天然ガスをパイプラインによりウラジオストクに運び、ウラジオストクで液化天然ガスにし、輸出する。

・天然ガスパイプライン　　サハリンからウラジオストク（ルースキー島）までは完成

東シベリアからハバロフスクまでのパイプラインが 2014 年着工（ガスプロムの計画は 2018 年スタート）

・石油パイプライン　　東シベリアパイプラインは完成（ナホトカからコズミノ）

・極東石炭の出荷能力拡大を目指している。

日本・韓国・中国の極東連邦管区との貿易占有比率

	輸出	輸入	合計
日本	28.86%	9.35%	23.20%
韓国	32.40%	17.93%	28.20%
中国	19.79%	46.35%	27.49%

・ロシア極東・バイカル地方社会・経済発展プログラム

12 年間で 34.5 兆円の投資

・沿海地方にも開発機関設置（沿海地方投資誘致局）

●中国のロシア極東地域における影響力の拡大に伴い、中国人の流入が増えている。

→ロシア極東地域のロシア人の人口の増加が必要となる。

●今後のロシア極東地域のイメージとしては、日本の 150 万人都市（福岡、仙台）が出現する構想。これに対し、日本として何ができるのか。海外と競争しながら、経済交流を図ることが鍵となる。

●環日本海航路の可能性としては、ＤＢＳクルーズ船が定期航路であることの有利性がある。

・境港が、中継ポイントとして発展する可能性がある。

・ＤＢＳクルーズの環日本海貨客船のバックカーゴにいろいろな地域の荷物を集められる可能性があり、ロシア、韓国以外の国（例えば中国）への物流に発展することも考えられる。

・荷物として考えられるのは農林水産物

→沿海地方の作付面積は、ソビエト連邦崩壊による農業保護政策の消滅のため、1990 年から半減しており、この遊休地の利用に各国が乗り出してきている。（中国が水耕栽培、韓国の現代グループ、日本の北海道銀行が進出しており、日本の他の企業も展開を検討している。）

→食品加工分野が有望では。

ウラジオストク日本センター。1996 年４月に開所し、日本より招聘した講師による経営、金融、マーケティング、貿易実務等の経済セミナー及びロシア人講師による各種現地セミナーを通じて人材育成を支援。ビジネスマン等対象の 10 ヶ月間の日本語講座を実施している。また、ロシア人専門家に訪日研修の機会を与え、日本における企業視察を中心とした研修を実施している。さらに日露経済交流の推進を目指し、ビジネスマッチング活動も行っている。

（１－３）沿海地方議会

〔応対者〕ゴルチャコフ・ヴィクトル議長

【ゴルチャコフ議長あいさつ要旨】

●訪問団表敬訪問への感謝
●鳥取県と沿海地方の関係は、良好に進んでいる。
●９月の東アジア地方議会・人民代表大会フォーラムの開催は大成功（日本からは秋田県と新潟市が参加（鳥取県議会は議会日程のため不参加））
●鳥取環境大学とウラジオストク国立経済サービス大学の連携にも良い印象

●鳥取県は、ウラジオストクに県の貿易センター（鳥取県ウラジオストクビジネスセンター）もあり、まだ貿易量は少ないが、発展する可能性を有している。
●現在は、バックカーゴが少ないが、日本とロシアの経済交流が進展することで増加を期待。バックカーゴの増加に貢献できる可能性のあるものとしては
・農業分野では、沿海地方で生産し日本へ輸出する計画（新潟県と交渉中）
・漁業クラスター（野村投資会社が関わる）に力
●投資環境の整備に取り組んでいる。（法律や国際投資ルールの改善）
●日本の各県と分野ごとに交流
・医療分野では、北海道とＩＴを活用したプロジェクト
・鳥取県とは青年交流（スポーツ、文化など）を行なっており、さらに発展を期待している。
●日本の自治体組織や行政知識に関心を持っている。
●さらなる交流に前向きに取り組みたい。

【会談の概要】（○：訪問団、●ゴルチャコフ議長）
○新潟県との農業連携について
●新潟県は、２回訪れ、農地を視察し、土壌サンプルを持ち帰った。
●窓口は沿海地方農業局で、農場所有権は沿海地方政府だが、詳細、スキームは未定で、11 月に最終判断を行なう。
●対象農産物は未定だが、野菜を想定、大豆の可能性もある。
○漁業（水産品）の輸出について
●原材料、加工品どちらのパターンもあるが、無加工品はすでに中国、韓国へ送り、製品は日本へ行っている。
●付加価値を高めるという課題からも加工輸出を目指しており、製品の加工率を高めていきたい。
○医療分野での提携について（鳥大医学部の医療ロボット「ダヴィンチ」をＰＲ）
●非常に興味深い。極東連邦大学にも「ダヴィンチ」はあるが、経験値は不明。提携余地はあると思う。
○人口 150 万人を目指すためには、産業発展が必要だが、鳥取県として協力できることは。
●人口増加政策はあるが、重要なのは雇用創出であり、ビジネス界も取り組んでいる。そのため、日本、ロシアの大企業の誘致を目指している。
●港湾整備や液化天然ガス基地、大造船場（6,000 人規模）などの計画もある。
●水産業にも取り組んでいきたい。
○境港から関西への輸送ルートが整備されたことをＰＲし、境港を売り込む。
●ロシアからの輸出貨物の増加に取り組んでいきたい。
○液化天然ガスの供給について、日本の脱原子力発電からも期待。ロシアからの液化天然ガスの輸出の拠点としての検討を依頼。（液化天然ガス受入のためには境港の整備も必要と認識）
●趣旨は、理解（液化天然ガス工場の完成を待つ。）
○日本とロシア（沿海地方）のビジネス情報の共有の必要性を指摘
●日本政府、日本センターとも情報を交換しており、ビジネス上の交流を図っている。日本のビジネス界との関係を強化していきたい。

ゴルチャコフ議長と、ロシア沿海地方・鳥取県両地域の経済交流の発展について意見を交換した。
なお、沿海地方へは、2012年９月に行われたＡＰＥＣ首脳会議以降もロシア政府要人の訪問が相次ぎ、2013年８月にもプーチン大統領が各閣僚を率いて沿海地方を訪問するなど、連邦政府の沿海地方に対する関心は高い。

（１－４）鳥取県ウラジオストクビジネスサポートセンター

〔応対者〕事務受託者　SENKON(Russia)有限責任会社　佐野淳代表取締役社長

佐野社長に環日本海定期貨客船が着く埠頭を案内していただき、その後に説明を受けた。

【主な説明内容】

●SENKON(Russia)有限責任会社は、2011 年から事務を受託し、環日本海定期貨客船が着く埠頭のある現ターミナルに移転・開設した。

●鳥取県ビジネスサポートセンターの業務は
　・日本とのビジネスに興味を持つロシア企業への仲介
　・日本からロシアへのビジネスニーズの仲介
●ビジネスでのネックは、ロシアの物流コストが高いこととリサイクルの概念がないこと
●ロシアの企業に対しては、システムを提案している。
　・日本の技術を利用してロシア国内で販売するスキーム
　・日本の「食」のロシアへの進出（可能性は大）
　　ロシアの材料を用い、日本の技術で調理・加工し、ロシアで販売
　　→日本食の作り方を指導するなど、プラスアルファの工夫を行い販売促進につなげる。

【質疑】（○：訪問団、●佐野社長）
○加工食品で、大手メーカーの環日本海定期貨客船航路の利用はないか。
●ロシアへの輸出は、メーカーから直接了解をとり行なっている。
●車関係の塗料、接着剤などの輸出で、環日本海定期貨客船を使うことを提案している。
●「鳥取」の名前はウラジオストクでは有名。定期航路があることの効果。
○農産物の加工や６次加工が有望と思うが、食文化の醸成など物流に至る以前のことが必要では。
●日本産の食品は、価格が高いことと、ロシアでは味が知られていないので、コーディネートやプレゼンテーションを地道にやっていくことが重要。
●長期保存できる加工品を次の町、次の町とデリバリーしていくこともできる。

環日本海定期貨客船が停泊するウラジオストク港埠頭。「鳥取県ウラジオストクビジネスサポートセンター」は同港ターミナル内にある。

センターでは日露両国の市場動向、貿易環境等のビジネス情報の発信、機械・金属・木材・水産品等に関わる企業の実情に合わせた取扱商材の収集、発信、提供等を通じ、相互のビジネスマッチング等に取り組んでいる。

（1－5）ＶＬマート

〔応対者〕ガリチェンコ・ガリーナ店長

ウラジオストク市内の高級スーパーマーケットであるＶＬマートを視察。品揃えも豊富で、清潔であり安心して買物ができる環境であった。

日本製の食品も多くあり、鳥取県産のコシヒカリも販売されていた。また、鳥取県産の梨や柿等については特設コーナーが設置され、目立つように置かれていた。なお、広島県産の柿、岡山県産のぶどうも一緒に置かれていた。梨１個 648 ルーブル／約 2,000 円と高いものの、味については好評とのこと（美味しければ高所得者層はリピーターになる）。

「VL マート」は、1999 年に創立されたハイパーマケットとスーパーマーケットのチェーン 。ウラジオストク、ナホトカ、アルセーネフ、パルチザンスク、フォキノ、ボリショイ、アルセニエフ等の沿海地方の主要都市に店舗があり、他の町にも新しく展開する予定。 2010 年の 7 月からウラジオストク市内の VL マート 2 店舗にて店内に日本品コーナーを設け、センコン物流が輸出した、野菜、果物などの販売で協力している。

【平成２５年１０月２５日（金）】

（２－１）ウラジオストク国立経済サービス大学

〔応対者〕ゲンナジー・イノケンティビチ・ラザレフ学長　外７名

【ラザレフ学長あいさつ要旨】

●ウラジオストク国立経済サービス大学と鳥取県の交流は、順調に進んでおり、この交流の推進は、大学だけでなく両地域の住民の利益となるもの。
●交流を推進するための両地域知事をはじめとした関係者の役割は大きい。
●鳥取県の平井知事は、過去に当大学を訪問しており、今後の来訪も期待している。平井知事によろしく伝えていただきたい。
●この９月には、竹内鳥取市長も来訪している。
●沿海地方と鳥取県の交流推進のためには、両地域の議会の果たす役割も大きい。本日は、有意義な意見交換を期待している。

【鳥取県からの質問事項に対する回答】

（事前に、訪問団からウラジオストク国立経済サービス大学に質問事項を提示しており、それに対する回答を行なったもの。）

[質問事項]

①貴大学が、鳥取環境大学及び鳥取大学との交流で期待するものはどのようなことか。
②交流事業として、研究交流の促進と学生間交流の実施を目指すと聞いているが、具体的にはどのようなことを行なっているのか。
③鳥取県は、ロシア沿海地方との経済的交流の拡大を目指しているが、そのために、貴大学と鳥取環境大学及び鳥取大学の交流が果たす役割についてお話しいただきたい。
④貴大学として、現在のロシア沿海地方と鳥取県の経済交流の状況をどのように捉えているか。また、今後更なる拡大を図るためにはどのようなことがあるのか。
⑤鳥取環境大学との協議の中で、ラザレフ学長から環境保護のマネジメント分野の取組みについて研究交流を始めてはという意見があったが、両大学が共通して取り組んでいる環境問題における最も大きな課題のひとつについての見解を伺いたい。
⑥日本を含め多くの地域に交換留学生を派遣しているが、今後の計画をお聞かせいただきたい。また、交換留学生を派遣する場合の問題点について伺いたい。派遣先に求める環境整備などのリクエストがあれば伺いたい。

＜ウラジオストク国立経済サービス大学と鳥取環境大学の交流について＞

●ウラジオストク国立経済サービス大学と鳥取環境大学は2011年に交流協定を結び、提携。
　・昨年は、職員が鳥取環境大学に招待され、漂着ごみに関するフォーラムに参加
　・今年も11月にシンポジウムに参加を予定
●今後、学生交換を進めたい。
　・鳥取環境大学でロシア語学科ができると聞いており、喜びとともに一層の交流促進を期待している。
　・ロシア語の教師を派遣し、鳥取環境大学を支援する用意がある。
　・ウラジオストク国立経済サービス大学としても日本語のネイティブの教師を募集しており、できれば鳥取県から派遣して欲しい。

●ウラジオストク国立経済サービス大学の日本語学科は、３年前になくなっているが、鳥取環境大学など日本の大学との交流が進んでおり、将来的には復活させたい。

・ウラジオストク国立経済サービス大学の附属学校には、小学校から高等学校まであり、それらの中には、少数ではあるが日本語を学んでいる生徒もおり、これらの生徒は、大学に進んでからも日本語を学ぶ可能性はある。

・以前は、日本語ブームで、多くの学生が日本語を学んでいたが、今は韓国語や中国語を学ぶ学生が多い。

・ウラジオストク国立経済サービス大学は、日本語を教えるだけでなく、日本に詳しい人材を育てたい。

＜経済交流への貢献について＞

●ウラジオストクの経済は、昨年のＡＰＥＣで著しく発展した。

●ロシアと日本の経済交流は、中国や韓国と比べレベルが低い状態にある。

●鳥取県と沿海地方で経済交流を発展させることができる分野は、農業分野と考える。

・沿海地方は、食糧不足の状態にあり、農業を発展させるための技術が必要

・沿海地方では政府の協力により、今年、米、大豆、乳製品の生産量が拡大されたが、技術不足のため食品加工が進んでいない。

＜環境問題への対応としての交流について＞

●今後、10年間で沿海地方の経済情勢が変化すると予測している。

・ガス、石油分野などが拡大（パイプラインの建設、ＬＮＧ工場の建設計画、製鉄工場の建設計画などがある。）

●しかし、産業が発展すると環境問題が発生することが予想される。

・専門家の不足により、環境問題が深刻化することが心配

・沿海地方に石炭の輸出ターミナルを建設し、日本に輸出する計画があるが、石炭ターミナルが環境への影響の研究を進めている。

・環境問題に関する研究を進めることが必要であり、この分野での鳥取環境大学との交流を期待している。

＜観光分野での交流について＞

●沿海地方では、現在、国際観光促進が大きなテーマ。鳥取県の観光客誘致施策に関心がある。

・鳥取砂丘レベルの砂丘は沿海地方に多くあるが、観光客はいない。鳥取砂丘には観光客が満足できる施設がある。

●沿海地方にも観光資源は多くあり、今後は、鳥取県からの観光客を誘致したいと考えており、意見をいただきたい。

※2012年に沿海地方を訪問した外国人観光客数…約26万5千人（前年比221.9%）。
うち中国人24万5千人、韓国人7千人、日本人4千人。大幅に増加した理由として、2012年より開始された中国人団体観光客に対するビザの免除制度が影響している。沿海地方から海外に出国した観光客数は51万5千人（前年比△21.0%）であり、出入国とも中国が圧倒的に多い。

＜交換留学生の派遣に係る環境整備について＞

●留学生の環境に対する問題は、聞いていない。お互いに学生が勉強できる環境を整えてもらえれば十分と考えている。

【意見交換】（○：訪問団、●ウラジオストク国立経済サービス大学）

○モンゴルでは、鳥取県のモンゴル協会が出資し、幼少期から日本語教育を行なっている。ウラジオストク国立経済サービス大学の附属の小・中・高等学校の授業に日本語教育を組み込めば、うまくいくのではないか。
県費で鳥取環境大学に日本語留学生を受け入れてはと、鳥取県知事に提案してはと考えている。ウラジオストク国立経済サービス大学で、ある程度日本語力のある学生を育成できれば、鳥取環境大学で受け入れることはできる。

○中国では、今、PM2.5 による大気汚染問題が深刻化している。このような環境問題に対して、鳥取環境大学にはエキスパートの教授がおり、ウラジオストク国立経済サービス大学から鳥取環境大学に学生や研究者を留学させ、専門家の育成を図っては。こうしたことが、両大学の交流の絆を太くしていくことになると考える。

●すばらしい提案だと思う。

●日本人観光客の誘致のための専門家を教えていただきたい。

○旅行会社のツアープロモーターを招き、日本人に合う観光資源を探してもらえばよいのでは。鳥取県にも大手旅行会社の支店があるので、そこの人を招けばよいのではと思う。鳥取県も東南アジアからの観光客誘致を図るため、東南アジアのツアープロモーターを招き、視察してもらった。その成果として、今年、香港から 25 便の連続チャーター便が実現した。

●現在、環境問題は、各国共通の問題となっている。生産活動における研究不足が環境問題を生んでいる。環日本海交流の最大のテーマの一つが環境問題であり、各国がこれを解決しなければ、周辺国へ影響が及ぶことになる。

●環日本海の各国で、環境問題に関する協定が必要であり、両大学では漂着ごみの問題の研究を進めている。

・漂着ごみの問題が話題になって、沿海地方でもリサイクル産業が進展した。
・1998 年に環境保護、リサイクルの法律が制定されたが、実効性がなく、最近見直しを進めている。

●日本の環境政策は進んでおり、これを学びたいと考えている。今後、ウラジオストク国立経済サービス大学では環境問題に力を入れて行きたい。経済発展を図るためには環境問題の解決が重要と認識している。

○鳥取県の海岸には、韓国のペットボトルが多く漂着し、町や部落、環境ＮＰＯが清掃活動をしている。環境問題は人類の心の問題であり、その意味で、教育は重要。

○ごみ問題で、法整備は重要だが、鳥取県民は自然と共生しており、自然とそうした意識が生活の中から芽生えている。また、観光促進のためにも環境保護の意識はある。鳥取市では、鳥取砂丘や河川の一斉清掃を年に数回イベント的にやることで、生活の中で住民意識の醸成を図っている。法整備のためにもこうした意識が重要と考える。

○日本製品への信頼が強いことをうれしく思う。また、観光では「オモテナシ」の心を強く持っていたい。

○日本におけるウラジオストクの認知度を高めることが必要ではないか。学生交流を推進し、お互いの良さを発見するというプランもあるのではないか。

●まず、文化を紹介し、その次のステップとして日本語を学ばせる。将来的に文化体験での派遣も考えている。

【同席した沿海地方議会議員との意見交換】（○：訪問団、●沿海地方議会議員）

●沿海地方には、韓国やアメリカの農園があるが、日本の農園はない。日本のある企業から大豆、トウモロコシの農場の話はあったが、ロシアとの合弁会社としたほうが良い。

●沿海地方には農業のできる多くの土地があり、両国のビジネスを促進したい。

・沿海地方には、150 万ルーブル（約 500 万円）以上外国企業が投資する場合、5 年間免税となる法律が制定された。これは、農業以外の全分野で適用となる。

・北朝鮮の企業が 5000 ヘクタールの農場を開いたが、沿海地方議会が土地所有者を紹介し、ロシアと北朝鮮で合弁企業を作った。（沿海地方の議会と政府は必ず協力する。）

○鳥取県は、面積が小さく、保有するシステムも小さい。沿海地方での事業は、大規模投資が必要であり、そのためには法的保護が必要。ここを考えて欲しい。

●政府として保証することができる。一番大事なことと認識している。

●原子力発電所の排水を浄化する専門家は鳥取県にいるか。日本ではどこで勉強するのか。

○鳥取県にはいない。日本では大学か、原子力発電所を作っている日立、東芝、三菱などの企業にいると思う。勉強は大学でしている。

ウラジオストク経済サービス大学。大学内にスポーツコンプレックス、劇場、ホテル、高級アパートなどを設置し、市内随一の施設環境を誇る。

大学以外にも高い教育レベルを誇る寄宿制学校等（日本の小学校から高校に相当）を有しており、地方高官や外交官等の子弟が通っている。

日本文化に関するイベントが頻繁に行われており（着物ショー、生け花の講習会など）、大学内には日本文化紹介のための専用教室や「富山-ウラジオストク友好庭園」（写真右下））が設置されている。

経済・観光・環境など様々な分野に関して、ラザレフ学長ほか教授陣と意見を交わし、友好を深めた。なお、ナターリア准教授（写真下・左）は今年7月・11月に鳥取環境大学に来学し、沿海地方の海ごみによる汚染の状況とそれに対するウラジオストク行政府や大学の取り組みについて発表等をされている。

（2－2）マツダ・ソラーズマニファクチュアリング・ルス

〔応対者〕河野智弘財務部長、松本雅裕執行役員

・工場内を見学（写真撮影厳禁）の後、工場の概要等のプレゼンテーションを受けた。
・工場は、完成車の組立、検査の工程であり、作業員は保有技術によりクラス分けされて労務管理がされている。
・トヨタ流の「カイゼン」が導入され、作業員は勤勉に働いている様子が印象的であった。
・従業員数　約1200人（平均年齢27歳）
・１日の組立台数　250台
・将来的には部品製造も計画

【主な説明内容】

●2009年に潜水艦の修理工場であった古い廃工場を全面修繕し、改装
・2009年9月6日にプーチン大統領、枝野産業経済大臣も出席し、開所式を行なった。
・ウラジオストク港に工場が隣接（部品をコンテナで輸入）し、シベリア鉄道にも直結（完成車をモスクワへ輸送）している。

●マツダとソラーズが、50%・50%出資し、設立した合弁会社

・生産車種は、　マツダ車

ＳＵＶ：マツダＣＸ５

セダン：マツダ６（日本名アテンザ）

双龍自動車（サンヨン自動車（韓国車の中堅メーカー））

ＳＵＶ：カイロン

スポーツピックアップ：アクティオン

・生産台数　2010年　13,700台

2011年　25,100台

2012年　36,100台

2013年　69,600台（ソラーズ４、マツダ４、トヨタ１）

→　2015年（2年後）　新工場を増設し、10万台の生産計画

●これまでのソラーズのメインは、海外車（韓国車）のライセンス生産

●マツダにとっては、ヨーロッパで一番の市場はロシア（以前はドイツ）であり、アクセラの需要が大きい

【説明に対する質疑応答】（○：訪問団、●：マツダソラーズ）

○新工場が完成したら、ボディー組立からするのか。

●部材については日本から調達（板金、プレスは日本で行なう）

・旧工場は部品庫として活用する。

○税関はどうしているのか。

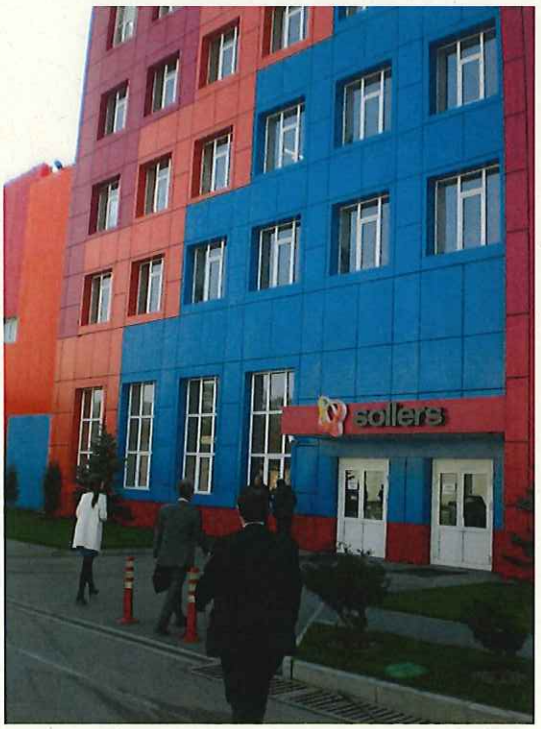
●工場の横の埠頭にコンテナ船が着くので、そこで税関を行なっている。今後の物流の円滑化のためもう少し面積が欲しい。

○従業員が1200人と聞いたが、これは地元からの雇用か。

●一部のエンジニアなど以外は、すべて沿海地方からの雇用

・今後、3,000～4,000人を雇用する予定

・教育、訓練、継続雇用策がカギとなってくる。これからは塗装、アセンブリ、メンテナンスなど難しい作業が出てくるので、難しい面もある。



2009 年末に稼動した「ソラーズ極東」工場。韓国双竜自動車の組み立てに加え、マツダ車（合弁 Mazda-Sollers、2012 年９月稼動）及びトヨタ車（合弁 Sollers-Bussan、2013 年２月稼動）の組み立て生産を開始。ウラジオストク港に工場が隣接しており（部品をコンテナで輸入）、シベリア鉄道にも直結（写真右下・完成車をモスクワへ輸送）している。

組立工場見学の後、河野財務部長、松本執行役員より生産の現況等について説明を受けた。
ロシア自動車市場は 2016 年にはドイツに次ぐヨーロッパ第２の規模に成長すると見込んでおり、ソラーズではロシアを重点地域と位置づけて注力していく方向。

（２－３）極東連邦大学医療センター

〔応対者〕オレグ・パク センター長外

はじめに、医療センター内を見学した後、パクセンター長から説明を受け、意見交換を行なった。

【極東連邦大学医療センターについての説明の概要】

・敷地面積　70,000 ㎡（敷地内に病院、リハビリセンター、検査施設）
・建物　　７階建、地下２階
・病床数　　200 床
　（内訳）　外　科　135 床
　　内　科　　15 床
　　小児科　　12 床
　　ＩＣＵ　　18 床
　　日帰入院 20 床
・手術室　　８室
・リハビリテーションセンター（７階建）
　　１～２階がリハビリテーション施設
　　３～７階はホテル（100 人収容）（※ホテルは、日帰検査、研修医、交換医師用）
・職員数　　医師を含め約 700 名

●外科分野が特に進んでいる
●9月1日から暫定的にオープンし、診療を開始している。
●全面的なオープンは、11月1日
●将来は、様々な研修を行い、日本の医療機関とも医師の交換や合同研修なども行ないたい。
　・放射線治療（ガン治療）では千葉県へ研修派遣
　・パクセンター長自身も研修のため2回来日（千葉と函館）

【主な質疑】（○：訪問団、●：パクセンター長）
○鳥取県でも県立中央病院の建替えの計画がある。また来させていただきたい。
　鳥取県との交流があっても良いと思う。知事も喜んでくると思う。
　鳥取大学医学部は、こちらに来ているか。
●一度、能勢学長とお会いしたことがある。
○この医療センターの費用は、どこから出ているのか。
●予算は、約7000万ドルで、すべて国から出てきている。
○予約は入っているのか。
●既に入っている。（パクセンター長は脳神経外科で、20人予約が入っている。）
○この病院は、極東の拠点病院か。
●ロシア極東地域で一番大きく、最新の技術を持つ拠点病院をとすることを目指している。
○近隣国の患者の受け入れはするのか。
●ＪＣＩ（国際的な医療機能評価）スタンダードの取得を目指している。（ＪＣＩを取得すると受入が可能となる。）
　・海外の様々な大学病院を参考としている。
　・パクセンター長は、韓国、ロンドン、ワシントン大学、ドイツ、日本で研修を受けている。

極東連邦大学は極東地域最大の総合大学。2009年10月の大統領令により設立が決定され、2010年10月8日に極東国立総合大学を母体として設立。2013年7月、同大学ルースキー島キャンパスにおいて、ロシアで最先端の医療機器を整備したメディカルセンターと研究所が同時に開設された。

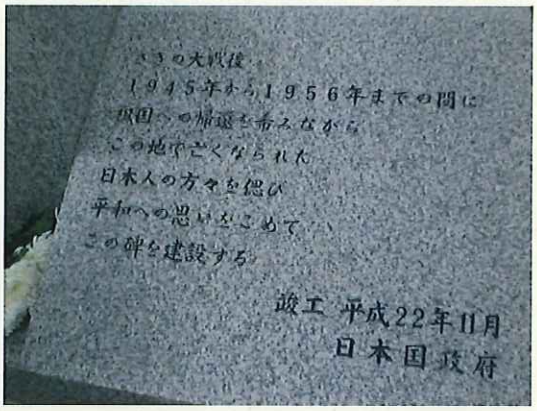
メディカルセンターでは、極東唯一のPET－CTや外科手術支援ロボット「ダヴィンチ」等、最新の医療機器が揃えられており、スタッフやパクセンター長より詳しく説明を受けた。

なお、2013 年 10 月 31 日、同センターと、鳥取大学医学部付属病院次世代高度医療推進センターが、北東アジア諸国地域サミットの枠内で高度診断・治療分野の提携に関する覚書を締結。両者間の研究者招聘、学生の研修交流、共同研究等の連携に取り組んでいく方針である。

【平成２５年１０月２６日（金）】

（３）日本人死亡者慰霊碑献花

第二次世界大戦終結直前に対日参戦をした旧ソ連軍は、満州、北朝鮮、南樺太、千島に駐留した多くの旧日本兵を収容所に抑留し、土木工事、鉄道工事、炭鉱作業等の重労働を強要、約10年間にわたる抑留中に労役、病気、寒さ等により多くの方々が犠牲となっている。

沿海地方では146の埋葬地が確認されており、2010年11月には日本政府が日本人死亡者慰霊碑を設置、2012年9月のウラジオストクＡＰＥＣに出席した野田首相も訪れ、献花している。

上村団長をはじめ、訪問団全員が献花をし、故郷を遠く離れた地で眠る方々への思いに心を馳せた。